刃傷の場は抱き止めた者が記し、泉岳寺の遺品は英国の書記官が見た

元禄十四辛巳（1701年）の三月十四日、江戸城の中で、浅野内匠頭長矩が吉良上野介義央に切り付けました。その場で浅野を抱き止めた梶川頼照は、そのときのことを書き残しています。

浅野は切腹を命じられ、翌年の十二月、浅野の家来だった浪士たちが吉良の屋敷に討ち入って、吉良を討ちました。

のちに泉岳寺を訪れた英国公使館の書記官ミットフォードは、浪士たちの遺品を見せてもらい、この話を英語で書き残しました。刃傷の場にいた者の記録から始まる話を、のちに英国の書記官が英語で伝えたのです。

On the fourteenth day of the third month of the fourteenth year of Genroku, 1701, inside Edo Castle, Asano Takumi-no-kami Naganori drew his sword on Kira Kōzuke-no-suke Yoshihisa. Kajikawa Yoriteru, who held Asano back on the spot, left a written account of that moment.

Asano was ordered to commit seppuku, and in the twelfth month of the next year, rōnin who had been Asano's retainers broke into Kira's mansion and killed him.

Later the British Legation secretary Mitford visited Sengakuji, was shown the rōnin's relics, and wrote the story down in English. A story that begins with the record of a man who was there at the attack was later told in English by a British secretary.

梶川の記によると、浅野は、このあいだから吉良に意趣（恨み）があったので討ち果たした、と言ったそうです。けれども、その恨みがどんな事柄かは一向に分からない、と重野安繹は述べています。浅野には、殿中で理不尽に切り付けたのは不届き至極として、切腹が命じられました。

元禄十五壬午（1702年）の十二月十四日の夜、浅野の家来だった浪士たちが、吉良の屋敷へ討ち入ります。大石内蔵介をはじめ、およそ四十七人で、吉良を討ち取りました。浪士たちはまず無縁寺へ行きましたが、門は閉じていて入れなかった、と浪士の一人の記録にあります。しばらく門前でためらったあと、泉岳寺へ向かったそうです。泉岳寺では、主君の墓に吉良の首を供え、皆で拝んだと記録されています。首は十七日の夜中に、泉岳寺から使いの僧によって、吉良家の左兵衛に届けられました。翌年、浪士たちは切腹を命じられます。

ミットフォードは、英国公使館の二等書記官でした。ミットフォードは、遺品を見た日のことを記しています。「A silver key once admitted me」（あるとき、銀の鍵が私を通してくれた）。 1871年、ミットフォードは『Tales of Old Japan』で、この話を英語で紹介しました。

According to Kajikawa's account, Asano said that he had held a grudge against Kira for some time, and so had struck him down. Yet what that grudge was is not known at all, says Shigeno Yasutsugu. Asano was ordered to commit seppuku, for having outrageously drawn his sword inside the castle.

On the night of the fourteenth day of the twelfth month of the fifteenth year of Genroku, 1702, rōnin who had been Asano's retainers broke into Kira's mansion. Led by Ōishi Kuranosuke, some forty-seven of them killed Kira. The record of one of the rōnin says that they first went to Muenji, but its gate was closed and they could not enter. They hesitated for a while before the gate, it is said, and then went on to Sengakuji. At Sengakuji, it is recorded, they offered Kira's head at their lord's grave and all bowed in worship. At midnight on the seventeenth, the head was sent from Sengakuji by a messenger priest to Sahyōe of the Kira house. The next year, the rōnin were ordered to commit seppuku.

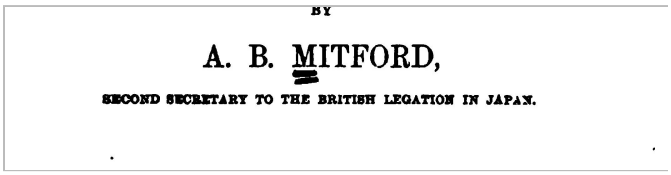
Mitford was second secretary of the British Legation. Mitford records the day he saw the relics. "A silver key once admitted me." In 1871, in Tales of Old Japan, Mitford introduced this story in English.

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

S9 海外から来たお客様　泉岳寺

お客様用

記録の言葉

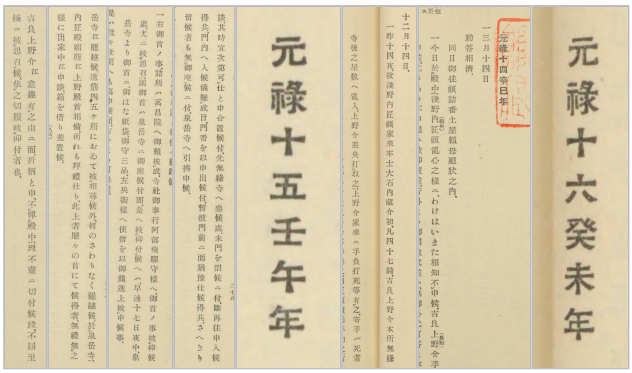

BY

A. B. MITFORD,

SECOND SECRETARY TO THE BRITISH LEGATION IN JAPAN.

A. B. Mitford『Tales of Old Japan』Vol. I（London: Macmillan, 1871）

> SECOND SECRETARY TO THE BRITISH LEGATION IN JAPAN. 扉


元禄十六癸未年

元禄十五壬午年



中央義士会編・渡辺世祐校『赤穂義士史料』上巻（雄山閣、昭和6年）

> 吉良上野介江意趣有之由ニ而、折柄と申、不憚殿中、理不盡ニ切付候段、不届至極ニ被思召候、依之切腹被仰付者也、 p.13
>
> 道筋四五ヶ所におゐて被相尋候外、何のさわりなく罷越候、於泉岳寺、内匠殿廟所江上野殿首相備、何れも拝禮仕り、此上者歴々の首にて候得者、無禮無之様に出家中江申談、箱を借り差置候、 p.318
>
> 一右御首ノ事、詰所八萬昌院へ御頼被成、寺社御奉行阿部飛驒守様へ、御首ノ事被仰候處、尤ニ被思召、則御首八泉岳寺ニ御座候付而、是へ被仰付候へハ、早速十七日夜中、泉岳寺より御首ニ、御はな紙袋、御守三品、左兵衛様へ使僧を以御饋進上被申候事、 p.384
>
> 先無縁寺へ參候處、未門を閉候ニ付、斷再往申入候得共、門内へ入候儀難成旨、門番を以申出候付、暫彼門前ニ而猶豫仕候得共、さへきり留候者も無御座候ニ付、泉岳寺へ引拂申候、 p.278
>
> 元祿十五壬午年／十二月十四日、／一昨十四夜、故淺野内匠頭家來牢士大石内藏介初、凡四十七騎、吉良上野介本所無縁寺後之屋敷へ亂入、上野介義央打取之、 pp.20, 22-23
>
> 元祿十四辛巳年／一三月十四日／同日御徒頭詰番土屋賴母廻狀之内、／一今日於殿中淺野内匠頭亂心之様ニ、わけはいまた相知不申候、 p.3
>
> 元祿十六癸未年／淺野内匠頭家來、舊冬右之面々へ御預ケ被仰付候者共、右之通以檢使、昨四日切腹被仰付之、 pp.8, 10

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

S9 海外から来たお客様　泉岳寺

ガイド用 ／ お客様にはお見せしません

刃傷の場は抱き止めた者が記し、泉岳寺の遺品は英国の書記官が見た

⚠ 機微（#149）：討ち入りで人が殺された話で、首を墓に供えた話です。墓所の前で語るときは、声の大きさと言葉に気をつけてください。

読み上げる文（お客様用の紙と同じもの）

元禄十四辛巳（1701年）の三月十四日、江戸城の中で、浅野内匠頭長矩が吉良上野介義央に切り付けました。その場で浅野を抱き止めた梶川頼照は、そのときのことを書き残しています。

浅野は切腹を命じられ、翌年の十二月、浅野の家来だった浪士たちが吉良の屋敷に討ち入って、吉良を討ちました。

のちに泉岳寺を訪れた英国公使館の書記官ミットフォードは、浪士たちの遺品を見せてもらい、この話を英語で書き残しました。刃傷の場にいた者の記録から始まる話を、のちに英国の書記官が英語で伝えたのです。

On the fourteenth day of the third month of the fourteenth year of Genroku, 1701, inside Edo Castle, Asano Takumi-no-kami Naganori drew his sword on Kira Kōzuke-no-suke Yoshihisa. Kajikawa Yoriteru, who held Asano back on the spot, left a written account of that moment.

Asano was ordered to commit seppuku, and in the twelfth month of the next year, rōnin who had been Asano's retainers broke into Kira's mansion and killed him.

Later the British Legation secretary Mitford visited Sengakuji, was shown the rōnin's relics, and wrote the story down in English. A story that begins with the record of a man who was there at the attack was later told in English by a British secretary.

梶川の記によると、浅野は、このあいだから吉良に意趣（恨み）があったので討ち果たした、と言ったそうです。けれども、その恨みがどんな事柄かは一向に分からない、と重野安繹は述べています。浅野には、殿中で理不尽に切り付けたのは不届き至極として、切腹が命じられました。

元禄十五壬午（1702年）の十二月十四日の夜、浅野の家来だった浪士たちが、吉良の屋敷へ討ち入ります。大石内蔵介をはじめ、およそ四十七人で、吉良を討ち取りました。浪士たちはまず無縁寺へ行きましたが、門は閉じていて入れなかった、と浪士の一人の記録にあります。しばらく門前でためらったあと、泉岳寺へ向かったそうです。泉岳寺では、主君の墓に吉良の首を供え、皆で拝んだと記録されています。首は十七日の夜中に、泉岳寺から使いの僧によって、吉良家の左兵衛に届けられました。翌年、浪士たちは切腹を命じられます。

ミットフォードは、英国公使館の二等書記官でした。ミットフォードは、遺品を見た日のことを記しています。「A silver key once admitted me」（あるとき、銀の鍵が私を通してくれた）。 1871年、ミットフォードは『Tales of Old Japan』で、この話を英語で紹介しました。

According to Kajikawa's account, Asano said that he had held a grudge against Kira for some time, and so had struck him down. Yet what that grudge was is not known at all, says Shigeno Yasutsugu. Asano was ordered to commit seppuku, for having outrageously drawn his sword inside the castle.

On the night of the fourteenth day of the twelfth month of the fifteenth year of Genroku, 1702, rōnin who had been Asano's retainers broke into Kira's mansion. Led by Ōishi Kuranosuke, some forty-seven of them killed Kira. The record of one of the rōnin says that they first went to Muenji, but its gate was closed and they could not enter. They hesitated for a while before the gate, it is said, and then went on to Sengakuji. At Sengakuji, it is recorded, they offered Kira's head at their lord's grave and all bowed in worship. At midnight on the seventeenth, the head was sent from Sengakuji by a messenger priest to Sahyōe of the Kira house. The next year, the rōnin were ordered to commit seppuku.

Mitford was second secretary of the British Legation. Mitford records the day he saw the relics. "A silver key once admitted me." In 1871, in Tales of Old Japan, Mitford introduced this story in English.

お客様にとっての発見

江戸城の刃傷は浅野を抱き止めた梶川頼照の記に残り、討ち入りのあと浪士たちが首を供えた泉岳寺の遺品は、英国公使館の書記官ミットフォードが見て英語で紹介したと記録されています。お客様は、いま立っている寺の話が、その場にいた者の記録から、外国の書記官の本へとつながっていることを見つけます。

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

S9 海外から来たお客様　泉岳寺

ガイド用 ／ お客様にはお見せしません

語り方のコツ

- **「浅野は、なぜ吉良に切り付けたのか」と尋ねられたら**

  > 「なぜかは、記録からは分かりません。浅野は意趣（恨み）があったと言いましたが、その恨みがどんな事柄かは一向に分からない、と重野安繹は述べています」とお答えください。

どこまで断定してよいか

断定してよい

江戸城の刃傷について

- 浅野内匠頭への申し渡しは、殿中で理不尽に切り付けたのは不届き至極として切腹を命じた（中央義士会編・渡辺世祐校『赤穂義士史料』上巻）
- 梶川頼照が白木書院の廊下で吉良上野介と話していたところ、浅野内匠頭長矩が後ろから小さ刀で切り付けた（経済雑誌社校『徳川実紀 第4編』）
- 梶川頼照は、そのまま長矩を抱き留めた（同）
- 浅野の遺恨がどんな事柄なのかは一向に分からない、と重野安繹は述べる（重野安繹述・西村天囚記『赤穂義士実話』）
- 梶川の記は、浅野が、上野介にはこのあいだから意趣があったので是非に及ばず討ち果たしたと言った、と書く（同）
- 元禄十四辛巳年三月十四日、土屋頼母の廻状は、殿中で浅野内匠頭が乱心の様子で、わけはまだ分からないと伝えた（中央義士会編・渡辺世祐校『赤穂義士史料』上巻）

討ち入りと泉岳寺について

- 波賀朝栄聞書は、泉岳寺で内匠殿の廟所に上野殿の首を供え、皆が拝礼したと書く（中央義士会編・渡辺世祐校『赤穂義士史料』上巻）
- 野本忠左衛門の書面は、十七日の夜中に、泉岳寺から首を使いの僧で左兵衛様へ届けたと書く（同）
- 寺坂私記は、一行がまず無縁寺へ行ったが門は閉じていて入れず、しばらく門前でためらったあと泉岳寺へ引き払ったと書く（同）
- 元禄十五壬午年十二月十四日の夜、大石内蔵介をはじめおよそ四十七騎が吉良上野介の屋敷へ乱入し、上野介を討ち取った（同）
- 元禄十六癸未年、預けられていた浅野内匠頭の家来たちに切腹が命じられた（同）

ミットフォードと泉岳寺の遺品について

- ミットフォードは1871年の『Tales of Old Japan』で、赤穂浪士の話を英語で紹介した（A. B. Mitford『Tales of Old Japan』Vol. I）
- ミットフォードは泉岳寺を訪れ、四十七士と主君の木像を見た（同）
- ミットフォードは「銀の鍵」で遺品の非公開の閲覧を許された（同）
- ミットフォードは『Tales of Old Japan』を出したとき、日本駐在の英国公使館の二等書記官だった（同）

★言わない

- 首を供えた場面を、記録の言葉を超えて言わないでください
- 浪士を「忠臣」「義士」とほめる言い方をしないでください
- 吉良家の「左兵衛」を、名を補って言わないでください
- ミットフォードが泉岳寺を訪れた年を言わないでください

この物語のもとになった小ネタ

- #124　浅野長矩を抱き止めた梶川頼照は、江戸城の刃傷を書き残した
- #149　浪士たちは泉岳寺の主君の墓に吉良の首を供え、首は寺から吉良家へ届けられた
- #49　ミットフォードは泉岳寺で、銀の鍵で遺品を見せてもらった

番号は小ネタの紙の番号です。詳しくは、それぞれの小ネタの紙で。

記録の言葉

ほか引用 13 件は紙に載せていません（2ページに収めるため）

原本の画像を 11 枚載せていません（2ページに収めるため）

お客様用の紙には、原本の画像を 3 枚載せていません（2ページに収めるため）

A. B. Mitford『Tales of Old Japan』Vol. I（London: Macmillan, 1871）　一次

> A silver key once admitted me to a private inspection of the relics. We were ushered, my friend and myself, into a back apartment of the spacious temple　p.29

 © 2026 Rekishi-Neta